

マッカーサー、どこがエライ

昭和十六年十二月八日、日本は真珠湾を奇襲し、米太平洋艦隊の八隻の戦艦すべてを沈没または大破させたほか、巡洋艦三、駆逐艦二隻を沈めた。またヒツカム飛行場なども襲い、戦闘機など三百四十三機を破壊し、米太平洋艦隊は事実上、消滅した。

日本軍は同時に英国のアジア最大の基地シンガポール攻略の前段としてマレー半島上陸作戦を実施するとともに英領香港、さらにフィリピンにあった米軍基地の攻撃に出た。

マニラの北約百キロにあるクラークフィールドは、台湾を発進した海軍陸攻と零戦の部隊が襲い、地上にあったB17爆撃機十八機を含む百四機を破壊した。米極東空軍もまた開戦初日でほぼ壊滅した。

高度の飛行技術をもった日本軍の爆撃を見たマッカーサーは「攻撃はドイツ人将校の指導で行われた」と本国に報告している。

日米開戦の初日の攻撃目標となったフィリピン。ここは地図を広げて見れば分かるように、日本と東南アジアを結ぶ線上に立ちただかるように広がる。

その地に日本を敵視する米國が進出し、植民地化したのは二十世紀の初め、米西べいせい（アメリカ・スペイン）戦争に米國が勝利した結果だった。

以来、アジアの市場、資源を指す日本に、米國はこの地の利を生かしていちいちよっかいをかけてきた。日米開戦の日に、日本がこの米軍とぶつかったのは、ある意味で歴史の必然だった。

というより、米國がここに進出したこと自体、日本の封じ込めという確固とした意思をもったものだという分析がある。

そこに至るきっかけは一八九三年、日清戦争前夜に起きた米國系市民によるハワイ王朝の乗っ取り事件だった。

同年一月十四日、ハワイ王朝の女王リリオカラニが高額納税者に限った選挙権を負しいハワイ島民にも付与する憲法改正を布告した。

リリオカラニは「アロハオエ」の作曲者としても知られる。彼女の布告に対して、ハワイの政治経済を握っていた米國系市民が反発した。

女王は最後の外交文書となった日本に対する不平等条約解消を承認する文書にサインした後、退位を宣言した。代わって米國人サンフォード・ドールがハワイ共和国の初代大統領に

就任した。

彼の一族は王領のラナイ島を接收し、今はパイナップル農場を経営する。商品名は「Dole（ドール）」。日本人が飲むべきジュースじゃあない。

この時代、世界は白人のやりたい放題だった。同じ年、英国はビルマの王を島流しにして大英帝国の植民地になっている。

そんな勝手を認めたのが一八八五年に結ばれたベルリン条約だ。白人国家が第三世界を植民地化する場合、その所有は早い者勝ちとし、海岸線の国を取った場合はその奥地も優先所有権をもつ、つまりソマリアを取れば奥のエチオピアも取れるとしている。

脅威日本への布陣

だから米国がハワイを取っても国際的には何の問題もなかったはずだが、そこに日本が巡洋艦浪速なげむと金剛こんごうを派遣してきたことは、これまでの章でも触れた。

二隻はホノルル港に入るとリリオカラニを脅した戦艦ボストンを挟むようにして投錨した。明らかに独立国ハワイ王朝を力尽くで奪った米国への非難を示していた。

さらにハワイ共和国樹立の祝砲をドールから求められると浪速の艦長東郷平八郎は「その要を認めず」と拒絶した。「他国の艦船も東郷（平八郎）に倣いなまホノルル港はハワイ王朝の喪に服すように静寂に包まれた」（ジョン・ワイリー「盗まれた王朝」）。

米国は自分が開国させたアジアの小さな国に大恥をかかされた。

日本はその翌年、日清戦争でも世界の予想を裏切つて勝利し、その賠償金で最新式の戦艦「富士」「八島」を英国に発注した。

日本はもはや名もない弱小国ではなくなった。「*If I have my way*（もしできうるなら）」と当時、海軍省次官だったセオドア・ルーズベルトは友人でもあるアルフレッド・マハンに書き送っている。「我々は日本が英国に発注した二隻の戦艦が英国を離れる前にハワイを併合し、そこら中に星条旗を掲げるべきだ。そしてニカラグア運河（後のパナマ運河）を早急に建設し、十二隻の戦艦を作つて半分は太平洋に配置すべきだ。私は日本の脅威を現実のものとして感じている」

そして米国は彼が手紙に書いたことを次々と実行に移していった。その最初が一八九八年の米西戦争のさなかに行われたハワイの併合と「脅威・日本」への布陣だった。

この戦争の表向きの口実はスペインの植民地支配に虐げられるキューバ人への同情となつ

ている。實際を言うときキューバ人がほとんど勝ちを制するところだったが、それはともかく、米国はハワイのときと同じに「自国民保護」の口実で戦艦メインを派遣する。

ところがハバナ港に入ったメインは停泊中に謎の大爆発を起こして沈没する。白人士官は上陸し、残っていた日系人水兵ら有色人種二百四十人が死ぬ。仕組まれた爆発と言われるゆえんの一つだ。

それが二月十五日のこと。ルーズベルトの友人の新聞王ハーストの新聞はこの謎の爆発を「スペインの卑劣な闇討ち」と断じて戦争気分を囁し立て続ける。そして米議会は四月十九日、スペインに宣戦布告した。

ルーズベルトの本心

そして開戦からわずか十二日後の五月一日、スペインのもう一つの植民地フィリピンのマニラ港に米艦隊が姿を現し、湾内のスペイン艦隊を壊滅させた。

現代の最新鋭艦でも太平洋を二週間では渡れない。まして十九世紀末の船だ。宣戦布告から急ぎ乗員を招集し、補給品を積み込んで出港したとしても、太平洋を渡ってマニラまで行

くには二カ月はかかる。つまりメインがハバナ港で爆沈する前に、米艦隊はマニラを目指して西海岸を出発していたことになる。

かくてスペインは売られた戦争に引きずり込まれ、やる気もないから八月にはフランスを間にたてて休戦を求めた。

勝手に勝利を宣言した米国はすぐにキューバに親米の傀儡政府をつくり、その一方でスペインからフィリピンとグアムを二千万ドルで買い取る交渉をする。そんな戦争があるか。

そして同じ時期に南米コロンビアの一州だったパナマに分離独立を指喚する者が現れ、米国はそれを積極的に手助けする。

パナマは独立を果たしたのち、米国に独立支援の謝礼として国土の一割を提供し、米国は早速そこを掘削して運河を作り始めた。

コロンビアはこの独立運動は米国が仕組んだものだと言え、結局、米国が二千万ドルを後に払っている。ルーズベルトがマハンに書き送ったことが大方その通りになっていったのを偶然と思う者がいるだろうか。

とくにフィリピンとグアムの領有はすでに乗っ取ったハワイ、ミッドウエーとつなげれば太平洋を横断する戦略ラインになるし、その位置を見れば「脅威の日本」をぐるり包囲する形

にもなる。米西戦争の目的は、表向きはキューバだが、この流れを見ればフィリピン・グアム領有こそが本能寺だったことが分かる。実際、その領有に費やした米国のエネルギーは凄まじかった。

殺害、拷問、お構いなし

それを示すのが四カ月で終わった米西戦争のあとに続く実質四年間のフィリピン平定戦争だ。米国はフィリピン攻略の折にスペインに抵抗するフィリピン人独立運動勢力にも接近、指導者のエミリオ・アギナルド將軍に勝利の暁に独立させると約束し、背後からスペイン軍を襲わせた。

しかし米国はスペインを倒したあとフィリピン独立の約束を反故ほごにして米植民地にし、アギナルドと配下の独立軍一万八千人の掃討を始めた。有色人種との約束など糞喰らえというわけだ。

アギナルドは抵抗し、凄惨な殺戮が一九〇二年まで続くが、この掃討戦の指揮を執ったのがアーサー・マッカーサー。あのダグラス・マッカーサーの親爺だ。

近代装備の米軍に追われたアギナルド軍が山に逃げ込むとアーサーは「彼らはもはや非正規軍だ(H・ブランドズ [Bound to Empire])と宣言した。

非正規軍、つまりゲリラなら捕虜にしても殺害、拷問はお構いなし。その協力者、つまり家族も逮捕拷問できるといふ意味だ。アルカイダ一派を捕まえてはグアンタナモで拷問にかけてきたのと同じ理屈。彼らはゲリラだ、何をしてもいいという理由づけはマッカーサーの親爺の発案だった。

かくて「水治療」と称する拷問が大っぴらに始まった。古くは魔女狩りのときにやった拷問だ。大の字に寝かせ、口をこじ開けて五ガロン(約二十リットル)の水を飲ませる。「それでも口を割らないときは尋問官が膨らんだ土人の腹の上に飛び降りる。彼は口から六フィートの水を噴き上げて絶命する」(米上院公聴会での証言)。ちなみにこの「水治療」はグアンタナモでもやり、問題になった。

アーサーはまた米兵が殺されたら、その地域の住民すべてに報復した。米上院公聴会で問題になったサマル島事件は米軍が待ち伏せされ約三十人が殺された事件で、アーサーはその報復にサマル、レイテの二つの島の住民数万人を皆殺しにしている。米上院に報告された数字では米軍は一九〇二年までの四年間で二十万人を殺している。

毛沢東は村を襲うと「まず村長とその家族を見せしめに殺して誰が支配者かを恐怖で教え込む」(石平『中国大虐殺史』)。都市になれば見せしめの量も増え「江西省吉安市こうせい きつあんでは一万人を殺した」(同)という。

米国のやり口も同じ。サマール、レイテで見せた残忍な大量虐殺でフィリピン人は米国人の怖さを骨身にしみこませられた。

恐怖で抑え込んだフィリピンに米国は現地人による傀儡政権をつくり、日本の脅威に対処するために、極東では最大の空軍基地を置いた。さらにフィリピン人十二万人に軍事訓練を施し、日本軍に対する前衛部隊に仕立てた。開戦時、現地人兵力は十個師団、それに米陸軍が二万人の計十四万人。日本側の上陸部隊が本間雅晴中将以下の四万三千人だから、ほぼ三倍の兵力とってよかった。

その十四万人の米比軍の指揮官に就任したのがアーサーの息子ダグラス・マッカーサーだった。

彼は父がフィリピンで現地民の虐殺を楽しんでいた時期に一度この地を訪ねている。

フィリピンの平定が終わった後、アーサーは駐日武官として日本に赴任する。日露戦争のさなかで、ダグラスも同行して日本の各地を視察している。

司令官の資質に欠ける

マイケル・シヤラー著『マッカーサーの時代』には、彼は「若將軍」と呼ばれたとある。フィリピン人を震え上がらせた残忍な將軍の息子としてだれもが震え上がるほどの知名度を持っていたという意味だ。

そして仮想敵としての日本も知悉ちしつしている。マッカーサーはまさに日本軍の最初の攻撃目標となるだろうフィリピンの指揮官として最も望ましい経歴をもっていた。

しかし経歴がよくてもそれがただちに優れた指揮官を意味するわけではない。

前掲シヤラーによれば当時の対日戦を想定したオレンジ計画では優勢な航空兵力と十四万の米比軍をもって日本軍の進攻を抑える。

その上ですでに三重の強固な防御線を築いていたマニラ湾北側のバターン半島とその沖に浮かぶ要塞島コレヒドールに退却し、ハワイにいる「米太平洋艦隊が到着するまで三カ月間を持ちこたえる」というものだった。

重度の閉所恐怖症をもつマッカーサーはこのコレヒドールに籠こもることは考えず、「米比軍は

上陸する日本軍を十分叩きのめせると自信をもつて語っていた」(前掲書)。

そして十二月八日。開戦の初日、マッカーサーは真珠湾にあった太平洋艦隊が殲滅せんめつされたことを知る。

側近はその報を受け、当然想定される台湾からの日本軍機の攻撃の出鼻をくじくために先制攻撃をかけるべきだと具申した。

しかしマッカーサーは何の反応も見せなかった。「では日本軍攻撃に備え、B17以下の爆撃機を安全地帯に退避させますか」という意見にも答えはなかった。「彼は九時間、ただうろつくだけだった」(前掲書)

結局、クラークフィールドにあった戦闘機や爆撃機は空中で警戒待機して日本軍の襲来に備えたが、昼過ぎに燃料が尽きて再び飛行場に降りた。そこに約二百機の日本機が襲いかかった。実は台湾の日本軍基地がこの朝、濃霧に覆われ、フィリピンに向けて発進するのが数時間遅れたための僥倖きやうこうだった。

マッカーサーには臨機応変という司令官としての資質がまったく欠けていたといわれる。ほぼ十年後、日本でふんぞり返っていたときに朝鮮動乱の一報を聞く。彼はそのときもどう対応しているのか分からないまま、数時間を徒過とくかしている。

彼の幾つかの伝記を読むと、真珠湾の朝、彼は救援に来るはずの太平洋艦隊がのっけに消滅してしまったことに大きな衝撃を受けたと一致して書いている。コレヒドールに籠つてもだれも救援に來ない。それに呆然自失してしまったと。

それなら日ごろ、自信をもって語っていたように十四万の米比軍で上陸する日本軍を迎え討てばいい。

天性の嘘つきマツカーサー

しかし彼はそれもやらなかった。この間に彼がやったのは日本軍機による空襲の被害報告で、彼は「日本軍の陸軍、海軍機あわせて七百五十一機が飛来し彼我^{ひが}の差は七対三という圧倒的不利な状況下にあった」と報告している。

実際は日本側が零戦、陸攻など百九十一機、米側は二百四十九機で米軍のほうが多かった。彼は天性の嘘つきと言われるが、それは真実だ。落ち込んでも嘘だけは達者だったのだから。二週間を無為に過ごしていた彼は日本軍の主力がリングアエン湾に上陸の報を受ける。愚将の下では数に勝る米比軍でもそれを阻止できなかつた。

ここで彼は初めて決断を下した。マニラを捨てコレヒドールに逃げこむことを。

マツカーサーらしい決断だが、こんな優柔不断な司令官が待ってもだれも助けに來ないコレヒドールで絶望的な籠城をする覚悟を決めたとは到底信じられない。実際、彼はその時すでに十四万將兵を見捨てて一人脱出することを考えていた証拠がある。

それはコレヒドールの要塞、といつても山を貫くトンネル「マリインタ」だが、そこに入つて二週間たったとき、一緒にマニラから逃げてきた傀儡政府かいらいのケソン大統領に、ある要求をつきつける。フィリピン軍を養成してやった謝礼五十万ドルをよこせというものだった。今の価格で言えば三千万ドルほどか。ケソンは脅されるままフィリピン政府がニューヨークのチェース・ナショナル銀行にもつ口座から五十万ドルをケミカル・ナショナル銀行のマツカーサーの個人口座に振り込む手続きをした。

実際には彼が「アイシャルリターン*I shall return*」とかいつて脱出する前の二月十五日に振り込み手続きが実行されるが、この間、彼は米政府に「私は守備隊とともにこの要塞にとどまる」と言い続けている。実に白々しいセリフだ。

十余万人の兵を残して脱出

このマリントラのトンネルで、ケソンがマッカーサーに強硬に抗議している。それは日本軍がマニラを落とした後、かつて米軍に裏切られたアギナルド將軍がラジオで米国の恐怖心を克服して本當の独立をかち取れと呼び掛ける演説を聞いた後だった。

ケソンは言う。「この戦争は日本と米国の戦いだ。フィリピン兵士に武器を置いて降伏するよう表明する。日米はフィリピンの中立を承認してほしい」

ケソンの申し出はルーズベルトに届けられたが、彼は冷たく「ケソンを国外に連れ出せ」だった。彼は潜水艦でコレヒドールから拉致され、再びフィリピンについて語る機会もないまま米国で病死した。

日本軍はマッカーサーがコレヒドールに籠った後、一度は攻撃を仕掛けるが、堅固な防衛ラインを攻めあぐね、二月初旬に地上攻撃を中断、空爆で牽制するだけにした。放っておいてもそう有害とは思えないと考えたからだ。実際それは正しい判断だった。

この攻撃中断中の三月十一日、マッカーサーはウイロビーなど腹心の部下と妻子を伴って

オーストラリアに脱出する。残された十余万兵士とフィリピン人難民は食糧も尽き果てたバターン半島の山中で飢えと日本軍の爆撃に消耗し尽くしていた。もう三カ月も放置しておけば向こうから白旗を掲げて降参してくるところだったろう。

しかし参謀本部はこの戦わない姿勢を非難した。三月下旬、大本営はバターン、コレヒドールの制圧を命じた。フィリピン攻略戦で最も愚かな決定だった。

四月九日、日本軍は大きな犠牲を払ってバターン半島を制圧した。手を上げて出てきた米比軍の将兵は実に七万を超えていた。

四月十四日、バターン半島の海岸線に出た日本軍は十八キロ沖合にあるコレヒドール要塞に対して砲撃を開始した。

コレヒドール側も配置した三十センチ榴弾砲りゅうだんぱう十二門、同口径のカノン砲八門で撃ち返してきたが、日本側の榴弾砲が四門一組の砲台の弾薬庫を直撃、一瞬にして砲台は吹き飛んだ。

五月五日、日本軍はコレヒドールに上陸するとマッカーサーに後事を託されたウエインライトが待ちかねたように白旗を上げた。彼らは降伏する機会を待ちかねていた。

いまこの要塞島とマニラ港を一時間で結ぶジェットホイルが就航している。米国人観光客が多い。マッカーサーが籠ったマリントのトンネルも当時のまま保存されている。たった一

発の砲弾で吹き飛んだ榴弾砲の砲台もそのまま残る。

バターン半島も含め、戦争の古傷が残る一帯は戦後、米軍が撤いたギンネム (Ginnum) の木が覆い隠しているが、そんな林の中には日本軍の空爆や砲撃で天井から地下まで貫かれた三階建ての兵舎や将校クラブなどがいくつも骨組みをさらしている。日本軍の正確な爆撃のあとが妙に生々しい。

フィリピン攻略戦はやらざるもがなのバターン半島攻撃というミスはあるものの、ほぼ順調に目的を達した。

死の行進への疑問

しかしそのあとマッカーサーの、というか米国の巧みな情報戦に日本は対処しきれなかった。あの「バターン死の行進」のことだ。日本軍は残虐にしてバターンで降伏した兵士を歩かせ、何千人もが死に、フィリピン兵士は五万も殺されたというあれだ。

マッカーサーがオーストラリアでのんびりしているときに、フィリピンから脱出してきたという米兵から初めて「死の行進」の実態を聞いたとされている。

彼はこの時期、十余万将兵を捨てて逃げた卑怯者と言われた。彼の「I shall return」は米兵の間で敵前逃亡の意味で遣われ、また安全なコレヒドールに籠って前線のバターン半島にも出てこない彼を揶揄して「Dugout Doug（ダグアウトダグ ベンチに籠ったまま出てこないダグラス）」というあだ名も広く知られていた。

そして何よりケソンから五十万ドルを私的に取った卑しい行為が軍首脳部の反感を買っていた。アイゼンハワーなどはかなり怒っていたとシャラーの本にはある。

そうした批判をそらすのに彼は天才的な才能があった。このバターの降伏後のできごとを彼は日本軍の虐殺行為に仕立て、誇大に騒ぎ立てることで白人の非白人種に対する蔑視感、嫌悪感を掻き立て、相対的に自身への非難を矮小化していく材料とした。それは成功した。

で、「死の行進」はどれほどの苦行だったのか。ジャーナリストの笹幸恵氏が数年前に実際にそのルートを歩いた顛末を『文藝春秋』（〇五年十二月号）に載せた。バターンを実際に歩いて、マッカーサーの言葉を検証してみたのが日本人では彼女が最初だったというのも驚きだが、彼女の語る実態にはもつと驚いた。

全行程はたった約百二十キロ。うち半分は貨車輸送で、米兵はそれを四、五日掛かりで歩かせられたことにしている。笹氏は貨車輸送の区間も含めてその道を四日間で「それもやや

風邪気味だったけれど」(前掲誌)ちゃんと歩き通して見せた。

そう言えば西村知美だって日テレ24時間一〇〇キロマラソンをやってみせた。それに比べ米兵がそこまで華奢きゃしゃとはホントに信じられないというのが彼女のルポの読後感だった。

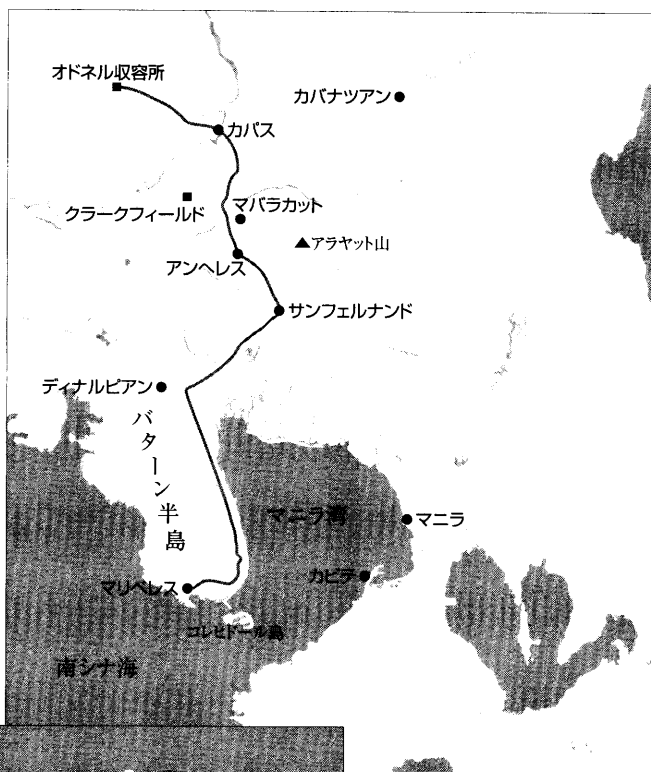
そうしたら、飢餓と病気に苦しむ兵士に死の行進を強制されたという米軍戦車隊兵士レスター・テニーがこの記事に抗議してきた。

抗議したテニーには〇九年五月、駐米大使の藤崎一郎が「元戦争捕虜には多大な損害と苦痛を与えたことを心からお詫びする」と謝罪、翌年の終戦記念日には彼らを政府招待で日本に招くという新聞報道があった。

繰り返すが、バターンに食糧こどももなしで籠ったのは米軍、とくにマッカーサーの責任だ。飢餓も病気も日本軍の責任の外側にある。おまけにこの死の行進では日本側の主張とテニーらの言い分に大きな隔たりがあり、その隙間を埋めるような検証も行われていない。笹氏はその意味で初めて検証を試みたものだが、それを頭ごなしに否定するというのも異様ではないか。

では日本の大使が謝罪したテニー氏の言う「死の行進」はどんなものだったのか。彼自身の『*My hitch in hell*』(我が地獄の兵役)から引用する。

第7章 「バターン死の行進」はクサイぞ！



彼はバターンに撤退していくとき、黄色い日本兵と区別がつかないという理由で途中の「家々に銃弾を撃ち込んだ」「一つの部落を皆殺しにした」。ベトナム・ソンミ村と同じことをやった。白人のフィリピン人殺戮は全く問題はないといっている。

降伏を前に兵器や車両の処分命令が出た。彼は「二十万ドルの現金の処分を任される」が、どうせ戦争は二、三カ月で終わるから「マングローブの洞に隠して目印をつけた」。

そして降伏。日本軍の将官が「抜き身の日本刀を馬上から振り回し、行進する米兵の首を通りすがりに切り落とした。私も顔を切られた」「渴きから水場に走るフィリピン人が射殺された」「煙草をせびられ、ないという銃の台尻で殴られた」。ピエール・ブルが日本人を猿に譬^{たと}えて描いた「猿の惑星」でも読んでいるような荒唐無稽な図が続く。

南京大虐殺の構図と酷似

歩かされ、殴られ、そして途中のサンフェルナンドから貨車に乗せられる。「扉は開け放したままで、付近の人々がバナナなどを投げ入れてくれた」ものの、その描写はゲットーからアウシュビッツに送られるユダヤ人の姿を彷彿^{ほうふつ}させる酷いものだということになっている。

その貨車の旅が実は約五十キロ、一時間で終わるとは書いていない。

そして死ぬ思いでたどり着いた收容所から彼は脱走し「抵抗組織と合流して日本軍の車両を襲い、爆破した」「日本軍とは数回の小競り合いをした」が、再び捕まった。

ハリウッド式拷問

アーサー・マッカーサーでなくともこういうゲリラ破壊活動は処刑される。しかしテニーは日本兵を騙して殺されもせず捕虜生活に戻る。この間、日本軍の残忍な拷問を体験した。「板に大の字に寝かせ足を十インチ高くする。それで塩水を飲ませる」

既に述べた米軍の「水治療」という拷問だ。米軍がアギナルド軍に対してやり、「百六十人がその拷問で死んだ」という報告が上院に上がっている。しかし日本人にはそんな水責めの歴史も知識もない。足を十インチ高くすることを知っている日本人はいない。

テニーはまた「日本軍は竹をひも状にして親指を縛ってぶら下げた」とも言う。昔、ゲリー・クーパー主演の『海の魂』で見たことがある。海賊の拷問だ。日本人が知るわけもない。またテニーは指の爪の間に竹ひごを突っ込まれ、それに火をつけられた。指が焼けた」と書く。

これも確かクーパールの映画『ベンガルの槍騎兵』だったか『ポー・ジェスト』だったかで見たと。テニーはあるとき、水牛狩りを手伝う。日本兵が彼に銃を貸してくれて狩りをした。しかし失敗してまた「銃の台尻で殴られた」。

日本軍兵士が、捕虜に銃を持たせるか。それに白兵戦の場合を除いて、銃の台尻で相手を殴ることはない。「銃は陛下から頂いた大事なものだからだ」と南方で戦った日本軍兵士が語る。銃の台尻で殴るのは「リオ・ブラボー」のジョン・ウエインだろうが。

要するに、南京大虐殺を言い募る支那人と同じに、そこで繰り広げられた光景はいずれも日本人の知らない行為ばかりだ。

こんなあやふやな、そして一方的な主張を日本人は黙って受け入れる、信じるというのか。フィリピンを攻略した日本軍は、やがて帰ってきたマッカーサーの物量に粉砕される。フィリピンでの戦死者は五十三万人に上る。最も悲惨で最も多くの英霊が眠る地は、日本人を最も醜い民族として語り、その残酷さを語る言葉に満ちている。それに一言でも反論すれば、サイモン・ウイゼンタールセンターまで抗議する。検証もされない彼らの主張の前に大使まで頭を下げなければならぬのか。

テニーの言も含め、例えば一流紙という朝日新聞や読売新聞が現場で検証してみたらどう

だろう。

そんな思いでバターン半島からマニラに戻る途中、クラークフィールドの近くマバラカットに「カミカゼ」の像が立っていた。

今は国道が走るこの場所はかつて日本海軍の二〇一空の飛行場があったところだ。昭和十九年十月二十五日、関行男大尉の神風特別攻撃隊六機がここを飛び立ち、ルソン島沖の空母セント・ローに体当たりして沈没させた。この地に碑を建てたのはマバラカット市の市長ダニエル・ディソンという。彼は命がけで祖国のために戦った関大尉の話に感銘して自費で碑と飛行服姿の日本人青年の像を建てた。除幕式に日本人はだれも参列しなかったという。

東のかたに標高一〇二六メートルのアラヤット山が見える。関大尉はその上を越えて飛んでいった。